

京都大学	博士（文学）	氏名	杉本 俊介
論文題目	‘Why Be Moral?’問題の再検討		
（論文内容の要旨） 本論文では、‘Why Be Moral’（なぜ道徳的であるべきか）という問い（以下、‘Why Be Moral?’問題）に対して、道徳的であることが実践理性の要求だからだ、と答える。以下、本論の要旨を各部、各章ごとに記す。 第I部 ‘Why Be Moral?’問題とは何か？ 第I部では、本論文が主題とする‘Why Be Moral?’問題がどのような問題なのかを明らかにする。 第1章 問題設定 本章では、‘Why Be Moral?’問題の問題設定を示す。1・1では、従来の‘Why Be Moral?’問題の議論のなかで、「なぜ...か」、「べき」、そして「道徳的である」という表現のそれぞれの意味と主語の省略という点に関して論者たちに共有されている最低限の了解を確認したうえで、本論文の‘Why Be Moral?’問題を提起する。提起するのは、我々にとって、そして私にとってでさえ、道徳を気につけない行為よりも道徳的に正しい行為をすべき理由とは何か、という問題である。1・2では、この問題が抱えるジレンマを示す。道徳的であるべき理由は「それが道徳的というものだから」などの道徳的な理由か、「それを欲しているから」などの非道徳的な理由かいずれかであるように思える。このジレンマは、一方で道徳的な理由は我々が求めている理由ではなく、他方で非道徳的な理由は誤った理由だと考えられる、というジレンマである。ジレンマの標準的な解消の仕方として自己利益の観点からの理由に訴える方法の問題点を指摘し、もう一つの解消の仕方として、実践理性の観点からの理由に訴える解消法を提示する。1・3では、‘Why Be Moral?’問題に答えるため、本論文の議論の概要を示す。本論文では、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求であるからだ、と主張する。 第2章 ‘Why Be Moral?’問題小史 本章では、これまでの‘Why Be Moral?’問題の歴史的背景を明らかにする。2・1では‘Why Be Moral?’問題が古代ギリシアにまでさかのぼる問題であることを確認する。2・2では、中世においても‘Why Be Moral?’問題に関連する論点が議論されていることを示す。2・3では、近代哲学と‘Why Be Moral?’問題のつながりを明らかにする。2・4では、次章以降で検討する現代の議論の流れを確認する。2・5で本章の内容をまとめる。 第II部 ‘Why Be Moral?’問題の前提 第II部では、‘Why Be Moral?’問題を疑似問題だとする立場に反論し、真正な問題だと論じる。そのため、この立場を支持する論証が不十分であることを示す。 第3章 道徳的でなくてもよいという立場 本章では、道徳的でなくてもよいという立場を支持する論証が不十分であることを示す。この立場として知られるのが、フィリップ・フットによる論文			

「仮言命法の体系としての道徳」での議論である。3・1では、この論文におけるフットの議論を検討してゆく。フットは、日常言語の「べき」の定言的使用からは道徳的であるべきだということが導かれないので、道徳的でなくてもよいと結論づけている。しかし、道徳的でなくてもよいと結論づけるフットの議論は不十分であることを明らかにする。

第4章 道徳であるべきだが、道徳的であるべき理由は存在しないという立場

本章では、たとえ、道徳的であるべきであっても、道徳的であるべき理由は存在しないという立場を支持する論証が不十分であることを示す。この立場をとる代表的な人物として、H. A. プリチャードと、初期の「よい理由アプローチ」(The Good-Reasons Approach)の論者たちがいる。4・1では、プリチャードがこの立場を擁護するために展開している二つの議論を検討する。特に難問なのが、「プリチャードのジレンマ」と呼ばれる第一の議論である。4・2では、初期のよい理由アプローチの論者たちの議論を検討する。彼らもプリチャードと同様に、‘Why Be Moral?’問題を立てようとするするとプリチャードのジレンマに似たジレンマに陥ってしまうので、道徳的であるべき理由は存在しないと結論づけている。4・3では、このジレンマの標準的な解消法として、ニールセンが提案しバイアーが論じるアプローチ、すなわち非道徳的理由のなかでも自己利益に訴えるアプローチを紹介する。そして、もう一つのアプローチとして、実践理性の観点からの理由に訴えたアプローチを予告する。前者のアプローチは、第III部で、後者のアプローチは第IV部で考察する。

第III部 自己利益の観点からの理由

第III部からは、‘Why Be Moral?’問題に答えようとする試みを検討する。道徳的であるべき理由とは何か。第III部では、その理由は自己利益の観点からの理由であるという立場を検討し、反論する。

第5章 ホッブズ主義

本章では、道徳的であるべき理由とは自己利益の観点からの理由であるという立場であるホッブズ主義の議論に対して反論する。具体的には、カート・バイアーとデイヴィッド・ゴティエの議論に反論する。5・1では、バイアーの議論を検討し、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いに答えることができないことを示す。5・2では、この問いに答えようとするゴティエの議論を検討し、反論する。5・3では、さらにゴティエの立場を擁護するピーター・ダニエルソンの議論を検討し、反論する。5・4では、こうしたホッブズ主義の答え全般にあてはまる問題点として、(1) 自己利益に基づく道徳が本当に「道徳」と呼べるものなのかが疑わしい、(2) 「なぜ自己利益的であるべきか」という新たな問題を生む、(3) 自己利益が規範理由たりうるかが疑わしくプリチャードのジレンマを解消できていない、という点を指摘し、ホッブズ主義のアプローチを批判する。

第6章 道徳と自己利益の調停

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は自己利益の観点からの理由であるという立場を検討し、反論する。ただし本章では、前章のように道徳を自己利益に基づけず、道徳と自己利益を対等なものとして扱い、両者の調停を目指す試みを検討し、反論する。6・1では、この調停ができないことをヘンリー・シジウィックが「実践理性の二元性」と呼んでいることを確認する。シジウィックは、神的サンクションによって調停を試みているとも解釈で

きるが、この試みには限界があることを示す。6・2では、R. M. ヘアによる経験的な調停を検討し、反論する。6・3では、サミュエル・シェフラーによる潜在的な調停を検討し、反論する。6・4では、ロザリンド・ハーストハウスによる概念的な調停を検討し、反論する。6・5では、こうしたアプローチと前章のホップズ主義との比較検討を行う。(1) 自己利益に基づく「道徳」が本当に道徳かという問題も、(2) 「なぜ自己利益的であるべきか」という問題も、本章で検討したアプローチでは回避できるが、(3) プリチャードのジレンマを解消できない。そこで第IV部では、もう一つの解消法を試みる。

第IV部 実践理性の観点からの理由

第IV部では、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。

第7章 人生の意味

本章では、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として人生の意味に訴えた‘Why Be Moral?’問題の応答を検討する。7・1では、ピーター・シンガーの『実践の倫理』最終章の議論を見てゆく。シンガーの試みは「推測の域を出ない」ものであり、人生の意味に訴えるアイデアを積極的に支持する議論を展開しているわけではないことを確認する。7・2では、人生の意味に関する様々な立場を検討し、人生の意味の観点を実践理性の観点として捉え直すべきだということを示す。

第8章 他者の利益

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として他者の利益に訴える試みを検討する。こうした試みは、トマス・ネーゲルによって行なわれている。8・1では、ネーゲルの議論を検討する。ネーゲルによれば、個人を離れたどこでもないところから我々と世界を眺めるとき、我々には他者の利益を促進する行為者中立的な理由が見えてくるという。そして、ネーゲルは、唯一受け入れ可能な理由が行為者中立な理由であることを示そうとする。しかし、コースガードが批判するように、こうしたネーゲルの立場（実質的実在論）からの議論は確信の表明にすぎないと反論できる。

第9章 自律

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として自律に訴える試みを検討する。こうした試みは、クリスティーン・コースガードやスティーヴン・ダーウォルら一部のカント主義者がとるアプローチである。9・1では、コースガードの『規範性の源泉』での議論を検討する。コースガードの議論に対する反論として、(1) 道徳法則としてどんな法則でも立てられてしまうという反論と(2) 一人称に最終決定権を与えるのはおかしいという反論を示す。9・2では、ダーウォルの初期の議論を検討する。9・3では、ダーウォルの最近の議論を検討し、‘Why Be Moral?’問題に対して答えようとするダーウォルの論証にも問題があることを示す。

第10章 実践理性の一側面としての道徳

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの

理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として、実践理性それ自体に訴える試みを検討する。その試みは、晩年のフィリップ・フットによってなされている。10・1では、フットの晩年の著作『自然的なよさ』（*Natural Goodness*）と論文「合理性とよさ」での議論を検討する。フットは「なぜ道徳的であるべきか」の「べき」と「道徳」の関係を反転させるアイデアを展開している。このアイデアは実践理性と道徳の関係に関する一つの理解を示唆している。フットによれば、道徳は実践理性の一側面なのである。フット自身はそのために、『自然的なよさ』のなかで自然主義を展開しているが、本論文ではこの反転というアイデアだけ採用すればよいことを示す。次章以降では、このアイデアを展開し、‘Why Be Moral?’問題に答えてゆく。

第11章 「実践理性の観点」再考

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、そもそも「実践理性の観点から理由」などあるのかという懐疑論に応答する。11・1では、シジウィックの実践理性の二元性を再び取り上げて、実践理性とは何かを明らかにする。11・2では、実践理性の二元性における利己主義の問題を取り上げ、利己主義に対する反論を与え、実践理性の一元性を支持する。11・3では、最近の実践理性の観点に対する懐疑論としてデイヴィッド・コップの背理法による論証を検討する。コップの論証に対して、本論文では、プリチャードの議論までさかのぼり彼の「認識論とのアナロジー」に再注目することで、「規範的正当化に関する調和主義」という立場を提案する。この立場によれば、コップが指摘する循環を問題なく受け入れることができる。

第12章 道徳的であるべき理由としての実践理性

本章では、これまでの考察をふまえ、次のことを主張する。道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求だからである。この主張の内実を明らかにしてゆく。この目的のため、あらかじめ本論文の主張に対する反論を用意し、それに答えてゆく。12・1では、道徳的でも非道徳的でもない「べき」など存在するのか、という反論に答える。我々は第三の観点としての実践理性からの要求をそうした「べき」として理解することができるし、第IV部で検討した先行研究でもそう理解されていることを見る。12・2では、なぜ第三の観点としての実践理性に従うべきか、という反論に答える。実践理性は実践理性を正当化することができ、「実践理性がそのように要求しているからだ」と我々は答えることができることを見る。12・3では、「道徳がそのように要求しているから」は論点先取ではないか、という反論に答える。道徳は実践理性の必要条件であり、道徳が道徳を正当化するわけではない。「なぜ道徳的であるべきか」という問いに「道徳がそのように要求しているから」と答えるわけではなく、「道徳的であることが実践理性の要求である」と答えることを見る。12・4では、実践理性の二元性の問題に答えていない、という反論に答える。倫理的利己主義に対する反論を与えることで、実践理性の一元性を支持する消極的な論証にはなることを示す。

本論文の結論

以上から、本論文では、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求であるからだ、と結論づける。

補章 日本での‘Why Be Moral?’論争

本章では、いわゆる「永井・大庭・安彦論争」に焦点を当て、本論文の結論がこの論争に対してもつ含意を示す。第1節では、大庭の見解を見てゆく。第2節では、永井の見解を見てゆく。第3節では、安彦の見解を見てゆく。第4節では、本論文の議論がこの論争に対してもつ含意を示す。大庭の議論は、「実害なき密室での違反が可能な状況」をどのように理解するかが不明であり、仮にギュゲスの指輪のような状況だと考えると不整合に陥ることを指摘する。また、「超越論的利己主義」を実践理性の観点として考えれば、その観点から道徳を優先する根拠を本論文で示せるし、「系譜学的考察」は本論文で見た史実にそぐわないことを示せるので、「道徳的でなくてもよい」という永井の立場を支持する論証にはなりえないことを示す。さらに、安彦が依拠するゴッティエやヘアの議論には問題点があることを示す。したがって、少なくとも三者の主張よりも本論文の主張のほうが優位にあることを示す。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、‘Why Be Moral?’問題、すなわち「なぜ道徳的であるべきか」という問題に関する包括的な研究である。この問題は、古くはプラトン以来、倫理学史を通じて絶えず議論され続けてきた問題であり、様々な答えも提出されてきたが、ひとつの主題として自覚的かつ集中的に議論されるようになったのは20世紀の英米圏での議論においてである。しかしそこでもそれぞれの論者の多様な関心からの多様な議論が展開されているだけであり、この問題を倫理学史研究をも含めて包括的に取り扱った書物は皆無であるといってもよい。それは、この問題が倫理学の根本に関わる問題であるにも関わらず、道徳というものの外側に立つことを要求するという点で、ある意味ではわれわれの常識に反する法外な問いであることに起因する。この問いそのものを「無意味である」とか「反道徳的」とあるとする見解が繰り返し提出されてきたのもそれ故である。これに対して本論文は、古代ギリシア以来の倫理思想史から近年の英米倫理学に至る長い歴史を包括的に俯瞰するとともに、この問題に対して真正面から取り組み、独自の見解を提出するに至ったという点において傑出したものといえるだろう。

本論文は4部12章に補論を加えた構成になっており、まず第1部では、‘Why Be Moral?’問題とはいかなる問題であるのかに関する考察が、原理的な点と歴史的な点の双方からなされている。第1章においては、この問題が純粋にメタ倫理的な問いと規範倫理的な問いの双方にまたがる問題であるという認識を示した上で、問題の原理的な根幹が、シジウィックの言う「実践理性の二元性」と、いわゆる「プリチャードのジレンマ」とよばれるものにあるということが説得力をもって論じられる。第2章においては、プラトンから現代に至る議論が丁寧に整理され、問題の所在を明確にしている。本論は、この第1部における議論だけをとっても、これまでになかったほどの独創的な包括的サーベイとなっており、独立した意義をもっているといえる。

第2部においては、‘Why Be Moral?’問題を疑似問題であると考え二つの立場が考察される。従来、道徳的でなくてもよいという立場と、道徳的であるべきだが、その理由は存在しないという立場は‘Why Be Moral?’問題の検討において排除されがちであったが、本論文は、フットやプリチャードによる問題提起の重要性、とりわけ後者によるジレンマの提出を高く評価した上で、そのそれぞれが行っている論証が不十分であり、さらなる考察が必要であることを明確に示している。

第3部では、‘Why Be Moral?’問題に積極的に解答を与えようとした試みの代表として、自己利益の観点からの説明が考察される。この、古くはホッブズによって提出されたとされる自己利益の観点は、‘Why Be Moral?’問題に対する解答としては最も強力なものであり、かつ様々なバージョンが存在するが、本論文ではこれらを網羅的に列挙するとともに独自の観点から分類、整理し、そのそれぞれを仔細に検討している。第5章では、バイアー、ゴティエといった強力な論者の議論が、それぞれの批判者たちの見解をも含めて検討されるとともに、第6章では、自己利益と道徳を調停することで‘Why Be Moral?’問題に答えようとする議論が考察される。ここで特筆すべきは、自己利益に基づく道徳がはたして真の意味での道徳と言いうるかとか、自己利益を追求する

「べき」理由は何かという新しい問題を生むだけではないのかといった従来からある批判に加えて、自己利益説が、先に検討されたプリチャードのジレンマを解消しきれていないということが力強く論証されている点である。

第4部では、これまでの考察を踏まえて、いよいよ本論文独自の立場としての「実践理性の観点からの理由づけ」が展開される。論者は、現代英米の規範倫理学におけるいくつかの観点が、「実践理性の観点」として定式化可能であるという目論見の下に、「人生の意味」についての理論、「他者利益」に関する理論、人間の反省能力と「自律」に訴える理論、「自然主義」的な徳理論のそれぞれが批判的に検討される。その上で、道徳が実践理性の一部であり、道徳は上位概念としての実践理性の命ずるものであるということが、倫理的利己主義を批判することを通じて力強く主張される。もちろんこうした見解には、循環論証ではないのかという懐疑論的な批判も存在しうるが、本論はこれを、プリチャードがジレンマの提出に際して用いた規範理論と認識論のアナロジーを、現代の認識論における調和主義という観点を換骨奪胎して再構成するという独創的な方法によって回避可能であるとする。

以上、本論文は、‘Why Be Moral?’という困難な問題に真正面から取り組み、歴史的考察を含めた包括的な議論を提出しえたという点において他に例をみない画期的な研究である。とりわけ、プリチャードのジレンマとシジウィックの「実践理性の二元性」に関する理論を重要視しつつ、数多くの先行理論を網羅的に検討した上で自己の結論を提出するという姿勢は、その独創性の点からも高く評価されよう。今後の同様のテーマにおける研究に対して与える影響はきわめて大きいと思われる。

しかし、本論にも指摘しておかねばならない瑕疵は残る。まず、論者が独創的に主張する「実践理性の観点」という概念が、多くの立場から抽出されてきたものであるだけに、その具体的な内実がともすれば曖昧になってしまいかねないという問題がある。また、‘Why Be Moral?’問題を純粋なメタ倫理学的問題と規範倫理学的問題にまたがるものであるという認識に基づく論者の議論は、本論文を豊かなものにしていることは確かであるとしても、さらには幾多の他の道徳内の「理論」に対して自らを正当化しえたとしても、はたして「合理的エゴイスト」のような特異な存在に対して決定的な説得力をもちうるかという点にはいささかの疑問が残る。しかしこれらは、論者の今後の精進によって必ずや補われるはずのものであり、直ちに本論文の画期的な意義を損なうものではない。以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成27年5月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。